

飾りのない美

芥川龍之介の短編小説「蜘蛛の糸」は、犍陀多の行動を通して、筆者は下心をなくし優しい心で人に接することの重要性を伝えています。この小説では、ある日極楽にいるお釈迦様が蓮池を通して地獄の底を覗き、犍陀多という人を見つけます。犍陀多は人を殺したり家に火をつけたりした大泥棒です。彼がした善行の一つは、一匹の蜘蛛の命を、奪わずに助けてあげたことです。この善行から、新たな善行が生まれ、犍陀多の行いを思い出したお釈迦様は彼に向けて蜘蛛の糸を下ろし、地獄から救おうとします。

物語の中では、このテーマを裏付ける出来事が2つあります。1つ目は犍陀多が行った唯一の善行です。その行動のお陰で、お釈迦様は蜘蛛の糸を手にとって、地獄の底にいる犍陀多へと下ろします。この例から、善行を行えば、それに相当する善行で報われるということが分かります。しかし、犍陀多は蜘蛛の糸を登っている時、ふと下を見下ろすと、自分の下から近づいてくる多くの罪人を見つけます。そこで、罪人に「この蜘蛛の糸はおれのものだぞ、下りろ」と喚いたとたんに、蜘蛛の糸がぶつりと音を立てて切れます。この瞬間、犍陀多は自分さえ助かれれば、他の人はどうなってもいいと思っていたに違いありません。この犍陀多のあさましい考え方をみると、2つ目の理由がすぐにわかります。もし犍陀多がまた善い行いをしたら、お釈迦様は別の方法で他の人々を助けようとするかもしれませんが、彼は自分ばかり地獄から抜け出そうとしました。まさにそのため、糸が切れてしまったのです。善行が相当の恩恵を受けたように、悪行も相当な罰を与えられました。

この2つの行動を比較すると、善い行動をとれば恩恵を受ける一方、悪いことを行えば、相当な罰を受けるということが分かります。途中で犍陀多の糸が切れてしまった理由は、悪い行いをしたからです。犍陀多の場合、罪人が同じ糸にのぼることを許していたら、蜘蛛の糸は切れなかったと思います。さらに、もともと地獄から抜け出す可能性があった理由は、善行を行ったからです。このことは、良い心を持っていることが、自分のみならず、他人にも利益をもたらすことを示しています。犍陀多の行動は人間の本質も表していますが、読者はそのような本質に従わず、他者を助けるために善行を積むように教えられています。また、物語ではの出来事を通して、芥川は優しい心で人に接することも大事だと教えています。このような教訓を得られるのが、「蜘蛛の糸」という物語です。